

生殖ビジネスの時代に、どう向き合えばいいのでしょうか

「雑学BN」の「TV番組等紹介欄」で案内していたので、ドキュメンタリー番組「一人で産む女たち～生殖ビジネスで母になる～」をご覧になった方もいると思う。

主に米国における生殖ビジネスの現状、精子提供者、卵子提供者、母となる女性へのインタビュー、また、東京の30歳台前半の35%は独身女性とかでその女性たちへのインタビュー等で構成されていた。

ネットで精子バンク会社（精密検査等で実際にビジネスになるのは提供精子の約30%とか）で自分が望む精子を見つけ、日常の買い物のように購入（1回6万円）に行き、凍結された精子を家で保管し、排卵日に合わせて人工授精治療（僅か2分：1回7万円・但し、妊娠するとは限らない）のために病院へ持って行く女性は、「遺伝子上父親となる男性のことをどう思うか」の問いに、「その男性は精子提供の器に過ぎない」と応える。

病院のDrは、「この番号の提供者の精子は、妊娠の確立が高いですよ」とさらっと治療中に会話に出るところを見ると、米国では既にこのビジネスはポピュラーということか。

ビジネス会社の説明会では、心理学者は、先々子どもに父親のことを尋ねられた時は「一歩進んだ生き方と応えればいい」とガイダンス。

精子バンク会社の中には、同じ精子提供者から生まれた兄弟、姉妹の情報も公開している所もあるとか。ある女性は、「いつかはわが子の兄弟、姉妹に会いたい」と応える。

また、不妊症故に、精子、卵子共に購入して自分の子宮で育てる女性は、「養子縁組の一步先をしているだけ」と応える。

一方、卵子バンク会社の提供登録女性は、生活費、学費等の捻出のためか多くが留学生という。

社会的自立が進み、結婚して自由を失いたくなく、でも「子どもが欲しい」と望む女性が増えていることが、こうしたビジネスが成り立つ時代背景なのだろうか。

いずれ米国のように日本でも生殖ビジネスがポピュラーになる時代がくるということであろうか。

生命の源をお金で買える生殖ビジネスが繁盛するであろう時代の到来に、我々はどう向き合い、どう価値観を変えていけばいいのだろうか。

選択された生命誕生とは？ 父親の存在は関係ないという家族とは？

みなさんはこうした問題にどう向き合うおつもりか、ご意見等をお聞かせいただければ幸いです。